

自分たちで読み進めるために

—第2学年 ようすや気持ちを思いうかべて読もう「スーホの白い馬」の実践から—

羽 場 邦 子

1 はじめに

本校の複式学級における国語学習は、「異単元異内容」でカリキュラムを組んでいる。入学当初、複式低学年の1・2年の教室では、1年生がひらがなを書いている一方で、2年生は「ふきのとう」を音読しているという状況であった。そこで、子どもたち自ら学習を進めていく力の育成が必要となる。本校の複式授業では、両学年の子どもたちが自分たちの力で主体的に学習を進めるのを、教師が、同時に見守りながら支援する授業形態（「見守り型」支援）を構成している。1日の生活の進行役を日直の子どもに任せる。授業の進行役もその子どもに任せる。学級全員の子どもが、順番に進行役となる。国語学習もその形態をとっている。

本校の国語科は、課題解決的な学習を中心に研究を重ねてきた。「自らが課題をもつ→課題解決に向かう→ふりかえる」という学習過程の中で、本年度、重視しているのは、「学び合い」である。「学び合い」を成立させるためには、何について学ぶのか、どのように自分の考えを伝えるのか、どのように他の考えを聞くのかなど支援のあり方が問われる。

本稿では、物語文を取り上げ、子どもたちの進行でどのように読み進めていったかを述べ、国語学習で課題解決的な学習を行うための「見守り型」支援のあり方を探っていきたい。なお、本稿では、2年生での実践のみを述べるが、同じ時間に、1年生は「ずうっと、ずっと、大すきだよ」の学習を行っている。

2 国語学習での学習の進め方

(1) 二人がリーダー

「朝の会」「帰りの会」「生活」など、1・2年同じ活動を行う場合は、1・2年一人ずつの日直がペアで進行を行う。「国語」「算数」は、異単元異内容を基本にしているため、各学年一人ずつのリーダーで進行する。国語学習の話し合いの場合、発言を聞くことと板書することを一人で行うのは、低学年では難しい。そこで、「助けてほしいなと思うときは、前の日の日直にお願いしよう。」と子どもたちに投げかけた。子どもたちは「おたすけ」と称している。中心になるリーダーは、その日の日直である。

《リーダーの仕事》

- ・責任をもって学習を進める。
- ・学習のめあてや課題、発言などを書く。
- ・進め方が分からないときは先生に聞く。

子どもたちに責任をもたせることは、「自分たちで」の第一歩である。「分からないことは、まず、リーダーに聞く。リーダーが分からなかったら先生に聞く。」という約束を徹底することにより、リーダーの自覚も生まれる。

(2) 学習は子どもたちに任せて

① ワークシートの活用

低学年であるため、ワークシートの活用を中心に学習を進めた。ワークシート作成の観点は、「教師がいなくても子どもたちで学習を進めることができるもの」「課題解決に向かうもの」の2

点である。子どもたちと話し合って教師が作成し、学習の過程でも、再三話し合い、修正を加えて改善していった。

- ワークシート項目例 —
- ・教材材名
 - ・めあて、課題
 - ・学習の進める順番とリーダーの指示
 - ・自分の考えを書く、まとめる欄など
 - ・ふりかえり

毎時間、大切にすることは、めあて・課題の確認、ふりかえりの場の設定である。ふりかえることにより、次時の学習につながると考える。また、ふりかえりの中から、ワークシートの改善も考えることができた。

② 学習の約束

- ・全員発言する。
- ・全員の作業が終わるまで待つ。

少人数の集団であるため、単式学級よりも、全員参加が必然となる。一人一人が発言するためには、自分の考えをもつことが必要である。また、書く・線を引く・ま

とめるなどの活動を全員できるまで待つということは、一人一人の学習を保障する手だての一つである。さらに、子どもたちが互いの学習を認めることにもなる。

3 実践事例—ようすや気持ちを思いうかべて読もう「スーホの白い馬」—

(1) 単元について

本単元は、少年スーホと白馬との心の交流を描いている。モンゴルの話であるという冒頭から、出会いの場面、悲しみを乗り越えてのスーホと詩馬の心のつながりへと、長文ではあるが、子どもたちにとって心を動かされる作品である。スーホに寄り添いながら、場面の様子や登場人物の気持ちを想像し、死を乗り越えての心の結びつきの強さを考えることができるようにする。

これまで、「お手紙」では、子どもたちの感想から課題づくりをした。本単元は、2回目の課題づくりとなる。ワークシートをもとに学習を進めた。ワークシート修正に当たっては、子どもたちの意見を取り入れた。また、場面毎に白馬に対するスーホの思いを書くことで自分の考えを確かめることができるようにした。

(2) 指導目標

- ① 場面毎にスーホと白馬の心の交流を読み取り、死を越えての心の結ぶつきを考えることができるようにする。
- ② 自分なりの考えをもち、友達の考えと比べて読み深めることができるようにする。

(3) 指導内容と計画（全13時間）

- 第一次 全文を読んで感想をもつ。課題を作り、課題解決への見通しをもつ。3時間
- 第二次 場面毎にスーホと白馬との心の結びつきを考える……………8時間
- 第三次 1年生に作品を音読する。……………1時間
- 第四次 学習をふりかえり、まとめをする。……………1時間

(4) 学習の概要

出あう

題名読みは、「スーホの白い馬」の「の」にこだわって学習した。スーホの（大好きな）白い馬、スーホの（大切な）白い馬というように（ ）に言葉を入れてイメージを膨らませた。全文を読み聞かせた後の一次感想は次のようなものであった。

心にのこったことは

《2場面》

- ・スーホが白馬をもって帰ってえらいな。
- ・白馬はかわいい。すごくきれいな馬だったんだな。

《4場面》

- ・とのさまはやくそくをやぶりスーホを帰らせた。

《5場面》

- ・とのさまは、白馬を弓でいころしたのがわるい。
- ・白馬に矢がささったのがかわいそうだな。

《6場面》

- ・スーホのところに白馬は帰ってきた。
- ・白馬をころされたところがかなくくてかわいそう。

《7・8場面》

- ・馬頭琴ができてスーホが幸せになってよかった。
- ・スーホが白馬のいうとおりに作ってよかった。
- ・馬頭琴は白馬のやさしさでできた。
- ・馬頭琴の音のうつくしさ。馬頭琴が心にのこった。

《全体を通して》

- ・白馬はかわいそうだな。スーホはすごく白馬のことが好きだった。

このようにして学習
していきたい

- ・それぞれの場面のスーホの気持ちや白馬の気持ちを考えて読みたい。
- ・場面ごとに気持ちを考えてプリントに書きたい。
- ・場面ごとにスーホと白馬の気持ちを考えてげきや紙人形げきをしたい。
- ・スーホや白馬のことを考えながら音読したい。
- ・場面ごとに声の大きさとかをかえたい。

見通す

《学習課題をつくる》

課題を作る前に、場面毎の題を考えることにより話の筋をとらえ課題を考えやすくした。一次感想をもとに、全員で場面毎の課題を話し合った。単元を通しての学習目標（めあて）は、「二人の心のつながりを考えて読もう」とした。場面毎の課題（本学級では「?はてな」と称している）は、場面の感想とあらすじをもとに子どもたちの意見をまとめた。課題の不十分なものも取り上げ、課題解決の過程で修正するように指導計画を立てた。

《学習の方法を考える》

ワークシートの作成

- めあてと課題を確認する。
- 今日、どのように学習をするか話す。
- 場面の音読をする。
 - ・どのような言葉に注意すればよいかを話し合う。
- 人物の様子や気持ち分かる言葉に線を引く。時間があれば書く。
- 課題について話し合う。
- 前の場面と本場面のスーホと白馬を比べて（～場面のスーホにとって白馬は・・・）話し合い、書く。
- 本場面のスーホへ手紙文を書く。
- ふりかえりをする。

- ☆本時の学習の課題確認と見通しをもつことができるようにする。
- ☆音読する際に、課題解決に向けて、どのような言葉に注意するか考えることにより、話し合いでの自分の考えをもつ手がかりとする。
- ☆線を引くことで、叙述に即して考えを出し合うようにする。
- ☆書くことにより二人の心の結び付きの深まりを自分なりに確かめることができるようにする。
- ☆自分たちの学習を自己評価し、次時の学習への意欲をもつようにする。

教師がワークシートを作成し、事前に子どもたちに提示し、「これで学習が進められるか」を問いかけ、修正した。また、学習の様子をから、次時のワークシートも工夫した。

子どもたちが苦労したのは、時間配分である。単元の学習の初めに教師からほしいの時間について指示した。

(十一月十二日 火曜日)

スーホの白い馬(六)

二人の心のつながりを考えて読もう。
② 白馬を見てどう思ったの？
(白馬は) して苦習(まじょう)

① 六場面をリレー読みしよう。どのようなどけにちかいかいすればよしよう。
② 白馬のよすやスーホおぼあんの気もちが分かることばにせんを引い。
③ を話し合ひしよう。

<p>④ 六場面のスーホ(お手紙を書き)まじょう。</p> <p>⑤ ④ 白馬のよすやスーホおぼあんの気もちが分かることばにせんを引い。</p> <p>⑥ 五場面とくつ(お手紙)を話し合ひしよう。</p>	<p>⑦ 六場面のスーホにとって、白馬は、スーホのよすやスーホおぼあんの気もちが分かることばにせんを引い。</p> <p>⑧ ⑦ 白馬のよすやスーホおぼあんの気もちが分かることばにせんを引い。</p>
--	--

課題を解決(追究)する

(ワークシート例)

《8場面-あとがき-より》

- めあて…二人のころのつながりを考えて読もう。
- 課題…馬頭琴が早原じゅうに広まって、スーホはどう思ったでしょう。
- どのような言葉に注意して音読したらよいか
 - …「そのうつくしい音に耳をすまし、一日のつかれをわすれるのでした」のところを本当に馬頭琴の音が聞こえてくるように読む。どんな音なのか想像しながら読む。
- 課題についての話し合い
 - …白馬が死んで悲しかったけれど、「いつまでもあなたのそばにいられますから」といって、いつまでもいっしょにいたいから楽器を作って、楽器になってもいっしょにいられるからうれしいと思う。
 - …くやしさを楽しさを思い出した。
 - …「聞く人の心をゆりうごかすのでした」で、心のつながりを知ってもらってうれしい。
 - …「早原じゅうにひろまりました～一日のつかれをわすれるのでした」で、いろんな人に聞いてもらってよかった。

子どもたちの作った課題には、「ひつじかい」の視点がなかった。そこで、本時では、「スーホにとって白馬は～」ではなく、「ひつじかいにとって馬頭琴は～」を話し合って書いてみようとして投げかけた。子どもたちは、「ひつじかいやスーホにとって馬頭琴は～」の方がよいと答えた。話し合いの結果、本時は「ひつじかいやスーホにとって馬頭琴は～」を話し合うことにした。この話し合いは、まとめの大切な場なので、教師がついて話し合い、板書も子どもと一緒にいった。

- 「ひつじかいやスーホにとって馬頭琴は～」の話し合い
 - …馬頭琴は、スーホにとって死んでもいっしょにいたい白馬。スーホの作った馬頭琴。
 - …心こめて世話したおかげですくすく育った、だれでも見とれるほどの雪のように白い馬だから、とても大切な楽器。
 - …おおかみと長い間戦い羊を必死で守ってくれた白馬、いっしょにいろんなことをした大切な白馬のことを思い出す。
 - …馬は、羊飼いにあって白馬と同じ大切な馬。
 - …スーホの白馬は、みんなの馬。白馬は、他の羊飼いの人たちにとっても大事な羊を守ったから

大事な楽器。すばらしい音色をみんなで聞いた。
《子どもたちの読みの深まりー「スーホにとって白馬は～」の記述からー》
どうしてそう思ったのかを話したり書いたりすることを条件に入れた。

- 1 場面「ひつじや牛や馬などは、モンゴルの人たちにとって～」
…生きていくのに大切な、生活を守ってくれる動物。
- 2～7 場面「スーホにとって白馬は～」
…がんばって育てた一番大切な馬。大切な家族。
…白馬もスーホも助けてもらった、白馬がいなかったら、羊を守ってくれた、会った日から家族のような動物。
…どんなときでもぼくはおまえといっしょだよと言った何よりも大切。今はどのさまのところにいるけど、心はつながっている、いっしょにいてほしい白馬。
…スーホの白馬はとられても大好きな大切な馬。毎日いっしょにいたい馬。スーホは白馬のことばかり考えていたからはなればなれになっても大好きな馬。
…死んでしまったけれど、いつまでも兄弟のようで世界中のものよりも何よりも大切に大好きな。
…やっといっしょにいる方法が分かった、死んでも楽器になっていつもいっしょにいられる。
- 8 場面「ひつじかいやスーホにとって馬頭琴は～」
…スーホも羊飼いやいっしょにいたことを思い出す大切な楽器。

☆モンゴルでの牛や馬や羊がどのような存在であるかに気づく。

☆スーホがおばあさんと二人暮らしでまずしいこと、家族のように大切に育てたこと、兄弟のようにかけがえのない存在であること、いつまでも一緒にいたいというスーホの願いと夢に出てきた白馬の思いから、二人の心のつながりの深まりを読む。

☆スーホと白馬のつながりは、二人の関係にとどまらず、モンゴルに生きる羊飼いのものと

なることに気づく。

ふりかえる

- 課題づくり…「話し合いがよくできた」「簡単にはつくれないけれどたよりになる」
 - 「スーホにとって白馬は～」を考えたこと
 - …スーホにとって白馬を思う気持ちをしっかり考え、みんなでまとめて書いた。
 - …大切に大好きな動物とか、考えたことをいろいろ発表できた。
 - …スーホと白馬は心がつながっているのがよく分かりました。
 - 学習の進め方について
 - …日直のときは、しっかり課題を考えたりまとめたりできた。
 - …みんなの話をよく聞いて、しっかり黒板に書いたりまとめたりすることができた。
 - …日直のときに分からないこともあったけど、おたすけの人などが教えてくれたからとてもよかった。自分はうれしかった。
- 子どもたちは、自分たちで進めることができた満足していた。話し合いが全員の発言でとどまることも多かったので、さらに、何を深めるのかを明らかにしたい。

4 実践を終えて

「見守り型」の授業構成では、教師が支援や助言を行う場面を見分けることが難しい。学び合いの「何を」「どのように」をさらに明らかにし、子供に任せる場と教師の支援の場を明確にする必要がある。学び合いの方法は、子供たちの中に少しずつ培われていると考える。学びが質的に高まるために、教材分析と実態把握とを合わせた指導計画を立てる、話し合いなどでの教師の助言や支援について細かく考えることを、次年度の課題とする。